

原遺跡第 2 次調査概要報告書

2018 年 3 月

岩沼市教育委員会

原遺跡第2次調査概要報告書

例　　言

- 1 本書は宮城県岩沼市南長谷字上原ほかに所在する原遺跡の第2次調査概要報告書である。
- 2 本調査は、原遺跡の内容確認のため実施したものである。
- 3 現地調査は、岩沼市教育委員会生涯学習課が平成29（2017）年11月1日～12月28日にかけて実施した。調査面積は、349.0m²である。
- 4 調査に際しては土地所有者である鈴木清一氏・鈴木和吉氏、農事組合法人原生産組合から御理解・御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 5 整理・報告書作成は平成30（2018）年1月4日～2月28日にかけて、岩沼市文化財整理室にて行った。
- 6 調査、および本書の執筆・編集は、生涯学習課文化財係 川又隆央・永井三郎・太田昭夫が担当した。
- 7 発掘調査、および整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）

相沢清利 恵美昌之 大橋泰夫 大村周一 小川淳一 押木弘己 日下和寿
斎野裕彦 白鳥良一 鈴木琢郎 千葉宗久 徳竹亜紀子 永田英明 藤木海
堀 裕 村田晃一

宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所

- 8 本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は次の通りである。
 - (1) 遺構の用語、および略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。
 - (2) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
 - (3) 縮尺は図に示すとおりである。
 - (4) 土層、および土器の色調は「新版標準土色帳」（小川・竹原：1973）による。
- 9 第1次調査は平成28年度県営圃場整備事業に伴い実施されたもので未報告である。
- 10 第2次調査の成果については、第44回古代城柵官衙遺跡検討会等で内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。
- 11 発掘調査の記録類、出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。
- 12 発掘調査・整理作業参加者は以下の通りである。

塩谷信行、小林国子、齋藤新彌、佐藤悦子、佐藤トシ子、高橋紀美子、南城美代子
蓮沼秀子、渡辺純子、渡辺幹雄

目 次

例 言

第1章 遺跡の概観

第1節 位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	2

第2章 調査に至る経緯と調査の方法

第1節 第1次調査の概要	4
第2節 第2次調査に至る経緯	7
第3節 調査方法と調査経過	7

第3章 調査の概要

第1節 基本層序	9
第2節 発見された遺構	9
第3節 発見された遺物	21
第4節 出土遺物から見た特徴	27
第5節 遺構の年代	27

第4章 総 括

第1節 調査のまとめ	29
第2節 遺跡の評価と今後の課題	29
引用・参考文献	30

写真図版

挿 図 目 次

第1図 岩沼市の地形分類図	1
第2図 岩沼市域の遺跡分布図	3
第3図 原遺跡第1次調査全体図	5
第4図 第1次調査の状況	6
第5図 遺跡範囲と調査地点	7
第6図 第2次調査における遺物取上げグリッド設定図	8
第7図 基本層序 (1/40)	10
第8図 第2次調査全体図 (1/200)	11
第9図 竪穴建物跡位置図 (1/200)	12
第10図 SI4、SI6、SI7、SD2 土層断面図 (1/60)	13
第11図 SI11、SI12、SI13、SI26、SD5 土層断面図 (1/60)	14
第12図 挖立柱建物跡および半截実施柱穴跡位置図 (1/200)	15
第13図 挖立柱建物跡 SB1・SB2 (1/60)	16
第14図 挖立柱建物跡 SB3 (1/60)	17
第15図 柱穴跡土層断面図 (1/60)	18
第16図 材木棚 SA1 平面図 (1/150) 断面図 (1/60)	20
第17図 竪穴建物跡出土遺物実測図	22
第18図 柱穴跡出土遺物実測図	24
第19図 溝跡出土遺物実測図	24
第20図 土坑出土遺物実測図	24
第21図 その他の出土遺物実測図	25

表 目 次

表1 岩沼市域の遺跡一覧表	3
表2 竪穴建物跡出土遺物観察表	23
表3 柱穴跡出土遺物観察表	24
表4 溝跡出土遺物観察表	24
表5 土坑出土遺物観察表	24
表6 その他の出土遺物観察表	26

写真図版目次

写真図版 1

1 トレンチ遺構検出状況（南から）（北西から）

写真図版 2

2 トレンチ遺構検出状況（西から）（北東から）

写真図版 3

3 トレンチ遺構検出状況（西から）（南西から）

写真図版 4

4 トレンチ遺構検出状況（西から）（南東から）

写真図版 5

1 トレンチ北側竪穴建物群（南東から）

SI4 カマド（南東から）

SI4 遺物出土状況（南西から）

SI6 土師器壺・甕出土状況（南東から）

SI6 土師器甕内骨片出土状況（南東から）

SI6、SI7（北東から）

SI12 遺物出土状況（南西から）

SI13 遺物出土状況（南東から）

写真図版 6

掘立柱建物跡 SB1・2（南西から）

掘立柱建物跡 SB1 P68 半截（南から）

掘立柱建物跡 SB2 P69 半截（南から）

掘立柱建物跡 SB3（北西から）

P29 半截（南から）

P37・38 半截（北東から）

P56 半截（南から）

P58 半截（南から）

写真図版 7

P62 半截（北から）

P105 半截（北から）

1 トレンチの柱穴跡群（南東から）

2 トレンチの柱穴跡群（東から）

SA1 材木抜取痕跡（2T 北西から）

SA1 材木抜取痕跡（2T 東から）

SA1 南側屈曲部（北西から）

SA1 北側屈曲部（南から）

写真図版 8

2 トレンチ拡張部（北西から）

調査区全景（上空から）

写真図版 9

原遺跡上空から岩沼市街を臨む（南から北を臨む）

原遺跡上空から阿武隈川を臨む（北西から南東を臨む）

写真図版 10

竪穴建物跡出土遺物 1 竪穴建物跡出土遺物 3

竪穴建物跡出土遺物 2 竪穴建物跡出土遺物 6

写真図版 11

竪穴建物跡出土遺物 4 竪穴建物跡出土遺物 7

竪穴建物跡出土遺物 5

写真図版 12

竪穴建物跡出土遺物 8 竪穴建物跡出土遺物 10

竪穴建物跡出土遺物 9

柱穴跡出土遺物 1

写真図版 13

柱穴跡出土遺物 2

溝跡出土遺物 1

写真図版 14

溝跡出土遺物 1 その他の出土遺物 2

溝跡出土遺物 2 その他の出土遺物 3

土坑出土遺物 1 その他の出土遺物 4

その他の出土遺物 1

写真図版 15

その他の出土遺物 5 その他の出土遺物 10

その他の出土遺物 7 その他の出土遺物 11

その他の出土遺物 8

写真図版 16

その他の出土遺物 9 その他の出土遺物 14

その他の出土遺物 12 その他の出土遺物 15

その他の出土遺物 13

写真図版 17

その他の出土遺物 16

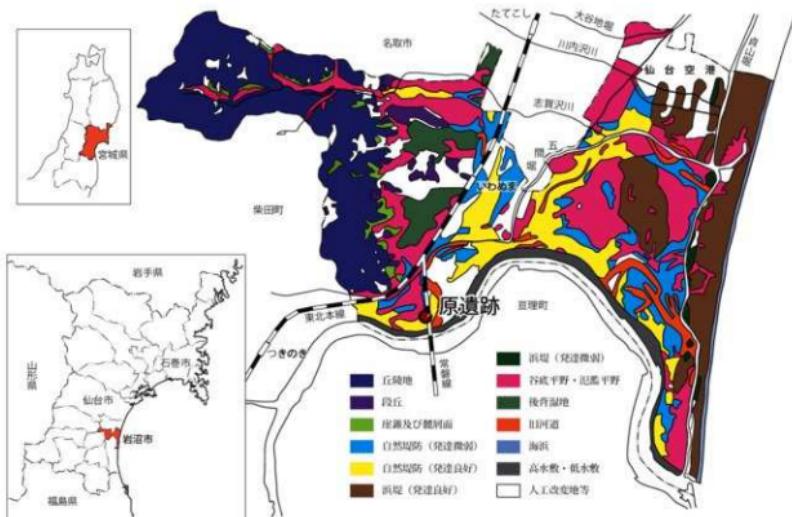
その他の出土遺物 17

第1章 遺跡の概観

第1節 位置と地理的環境

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5,400km²を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高100～300m）と高館丘陵（標高200～300m）、さらにこれらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当し、岩沼西部丘陵の東縁から太平洋までの間に7～8kmの幅をもって発達する。この沖積平野は阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀津川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が顕著に発達している。本報告対象となる原遺跡は、阿武隈川北岸から200～300m北に位置し、阿武隈川北岸に形成された自然堤防上に立地している。



第1図 岩沼市の地形分類図

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

岩沼市域では、これまでに縄文時代から近・現代にかけての遺跡が67箇所で確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、平成23年（2011）から平成26年（2014）にかけて行われた岩沼市史編纂事業に伴う学術調査により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下にこれまでの発掘調査などによって得られた古墳時代、および古代の知見について、その概略を記す。

古墳時代

古墳時代の遺跡は高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【2】では、平成24年（2012）の市史編纂事業に伴う古墳周溝の発掘調査において、土師器や須恵器のほか、底面から一本二又鉗が出土した。また、地表に顕在する全長約39mの墳丘は周囲が後世に削られたものであり、本来は全長約48mを測る前方後円墳であったことが推定されている。造成時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代や古墳の立地条件、墳丘の形態などの点から前期にさかのぼる可能性が示されている（岩沼市史編纂委員会2015）。

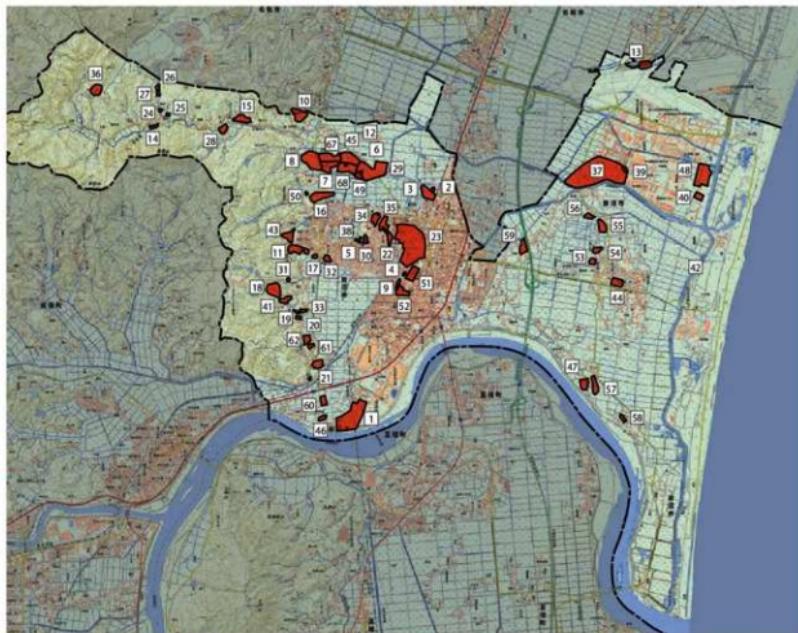
横穴墓は岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面で多く造られ、これまでに10箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【11】、丸山【4】、二木【9】、土ヶ崎【22】、引込【30】などの横穴墓群では過去に発掘調査が行われ、7世紀前半頃から造営が開始され、8世紀前半頃まで機能していたと考えられている（岩沼市史編纂委員会2015）。

集落遺跡では北原遺跡【8】をはじめとする長岡丘陵遺跡群が前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約500mの位置に所在する熊野遺跡【16】でも、平成25年（2013）の駐車場整備工事に伴う発掘調査において、同時期の竪穴建物跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【13】では、平成24年（2012）の河川改修工事に伴う確認調査の際、前期の塩釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らかとなった。中期以降の様相については市内では遺物の発見が少なく判然としないが、平成29年（2017）の五間堀川河川改修事業に伴う野郷館跡【37】の発掘調査では南小泉式の土師器壺が出土し、第Ⅱ浜堤上でも将来、古墳時代の集落遺跡の発見が期待される。

古代

古代の遺跡については、近年、開発や市史編纂事業による発掘調査が増加傾向にある。集落遺跡としては北原遺跡、熊野遺跡で7世紀末から10世紀前半にかけての竪穴建物跡が発見されている（岩沼市教育委員会2016）。なお、本遺跡が所在する「玉崎地区」においては、これまで南玉崎遺跡【46】、樋遺跡【60】で土師器・須恵器などが出土している。このうち樋遺跡では市史編纂事業による発掘調査のほか、岩沼西部地区圃場整備事業に伴う発掘調査が実施されており、7世紀末～8世紀初頭頃に位置付けられる須恵器の高台壺などが発見されている。

このほか慈覚大師開基の伝承を有する岩藏寺【36】には、平安時代後期に製作されたと考えられる木造如来像が存在する。岩藏寺は中世には地域の靈場として機能していたと考えられており、現存する薬師堂の背後で造成されている平場には板碑が立ち、その周囲には多数の人頭大の礫を集めた集石遺構が残る。さらにこの平場の一画では小石を塚状に集積した遺構がみられるが、市史編纂事業による発掘調査では遺構底面で火を焚いた痕跡と須恵器土器の壺が発見されており、平安時代において何らかの祭祀行為を行っていた可能性が考えられている。



第2図 岩沼市域の遺跡分布図（国土地理院発行電子地形図25000に加筆）

表1 岩沼市域の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	原遺跡	古墳・古代	23	根ヶ崎城跡	縄文・弥生・中世・近世	45	長塚北遺跡	縄文・古墳・古代
2	あめ桜古墳	古墳	24	八森A遺跡	縄文	46	南玉崎遺跡	縄文・古代
3	かめ塚古道跡	弥生・古墳	25	八森B遺跡	縄文	47	西御賀原遺跡	古代
4	丸山城穴墓群	古墳	26	御台A遺跡	縄文・近世	48	高木灘遺跡	古墳・古代
5	白山城穴墓群	古墳	27	御台B遺跡	縄文・近世	49	長澤寺前遺跡	近世
6	新明澤古墳	古墳	28	新宮下遺跡	縄文	50	印ノ原遺跡	中世
7	村の内遺跡	弥生・古墳・古代	29	千柏崎遺跡	縄文・弥生・古代・中世	51	丸山遺跡	中世・近世
8	北原遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	30	引込橋穴墓群	古墳	52	竹割神社境内遺跡	中世・近世
9	二木城穴墓群	古墳	31	吉山遺跡	弥生・古墳	53	新宮下遺跡	古代
10	山懸南横穴群	縄文・古代	32	新山遺跡	縄文・古代	54	河原遺跡	古代
11	長谷寺横穴墓群	古墳	33	畠堤上貝塚	縄文・古墳・古代	55	西土子遺跡	中世
12	長塚古墳	古墳	34	朝日古墳群	弥生・古墳・中世・近世	56	前野遺跡	古代
13	孫兵衛古道跡	古墳前	35	朝日遺跡	古墳・古代・中世	57	利根遺跡	古代
14	大日遺跡	縄文	36	引籠立遺跡	縄文・古代・中世	58	高原遺跡	中世
15	下鬼ノ人遺跡	縄文	37	下野郷遺跡	古墳・古代・中世・近世	59	上小路遺跡	古代・中世
16	熊野遺跡	古墳・古代	38	白山廻	近世？	60	植遺跡	古代・中世
17	平等山横穴墓群	古墳	39	船舟遺跡	古代	61	柳遺跡	古墳・古代
18	新御跡	中世	40	にら塚遺跡	古墳・古代	62	台遺跡	縄文・弥生
19	堀堤上横穴墓群	古墳	41	新原前遺跡	縄文・古代	63	長谷遺跡	縄文・古墳
20	相方泉遺跡	弥生・近世	42	貞山廻（木曳廻）	近世	64	上小瀬遺跡	弥生・古墳・古代
21	長谷小原跡	空町	43	竹舟遺跡	弥生・古墳・古代			
22	土ヶ崎横穴墓群	古墳	44	新山遺跡	奈良・中世・近世			

第2章 調査に至る経緯と調査の方法

第1節 第1次調査の概要

平成25年（2013）11月に新規農業農村整備事業についての照会が仙台地方振興事務所からあり、岩沼市教育委員会では県史跡であるかめ塚古墳をはじめとした13遺跡地が対象範囲内に位置、あるいは隣接している旨を回答した。その後の協議を経て、平成28年（2016）6月22日付で「岩沼西部地区埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台地方振興事務所と岩沼市によって締結され、同年10月1日より調査準備に着手した。

原遺跡第1次調査は10月14日から開始した。調査は排水路敷設部分に限定したことから、当初は幅2m、長さ5～10mの試掘トレーンチを11箇所設定した。しかしながら、掘削中に多数の遺物が発見され、また遺構確認作業でも竪穴建物跡や大型の堀方を持つ柱穴跡が発見されたことから、工事によって失われる部分においては本発掘調査を実施し、記録保存に努めた。以下にその概要を記す。

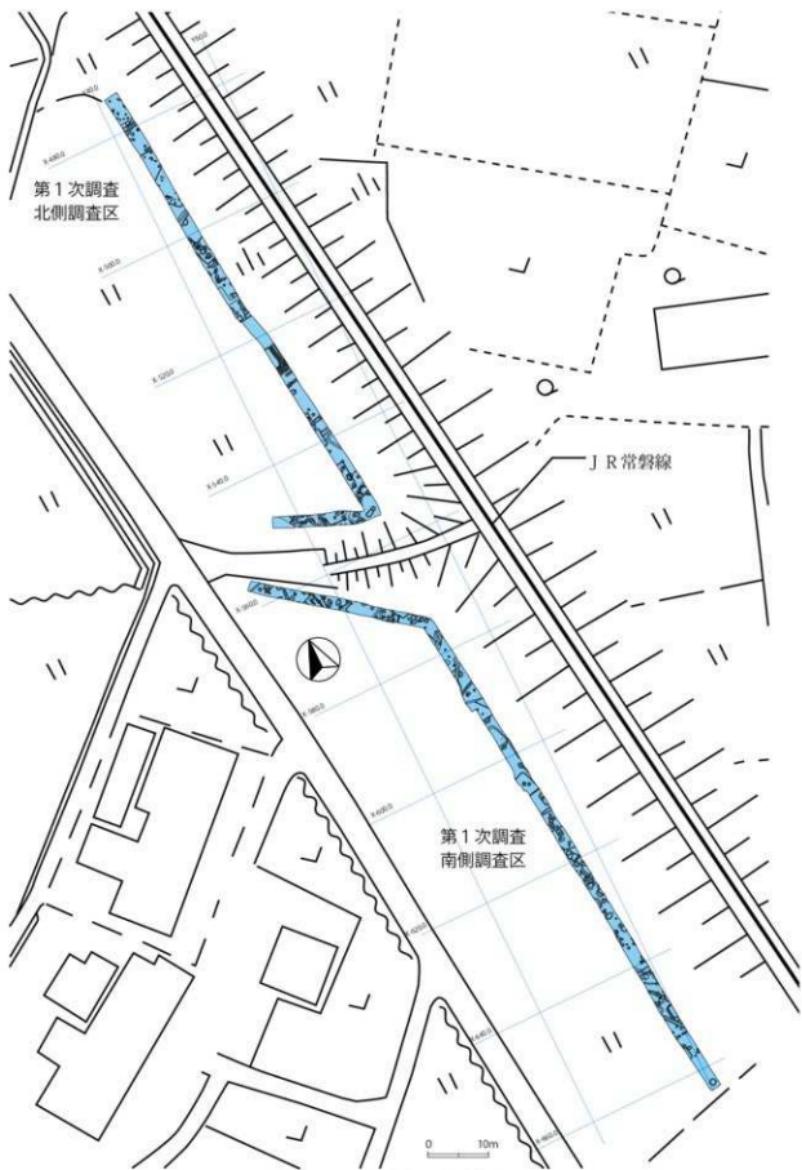
第1次調査では、現地表面から60～100cmほど下位に存在している自然堤防形成層と考えられるにぶい黄褐色砂質シルト上面で遺構・遺物の確認に努めた。調査区は旧踏切へ至る通路を境として、南側と北側の2つの調査区を設定して調査を実施した。

北側調査区では、竪穴建物跡9棟、掘立柱建物跡1棟、溝跡7条、土坑12基、柱穴跡を89穴確認した。各遺構の年代観については、今後の出土資料の整理作業を経て本報告の際に詳述するが、古墳時代後期から平安時代にかけての遺物が多数出土している。

北側調査区で発見された遺構で特徴のあるものを記すと、古墳時代後期の土器を出土したSI002竪穴建物跡は、床面に大量の焼土と炭化物が堆積し、等間隔で炭化木材が並んでいる様子が見られた。この炭化木材は付近に柱穴が見られなかったことから、火災にあった竪穴建物の屋根材が焼け落ちた可能性が考えられる。また古墳時代終末期頃の可能性があるSI003竪穴建物跡では、北壁に設置されたカマドの燃焼室内に、土師器小型甕を逆位に設置して支脚として使用していたことが明らかとなった。そして平安時代と考えられるSI008竪穴建物跡は、一辺が7m以上になるような大型の竪穴建物であることが判明した。調査区中央付近で4穴が確認できたSB001掘立柱建物跡は、いずれの柱穴も調査区外へ展開するため全容は不明ながらも、東西方向に主軸を有すると考えられる。各柱穴とも方形を意識して掘られており、官衙的な施設を構成する建物であった可能性がある。なお、方形を呈する柱穴は調査区内でも南側を中心に点在しており、今後の調査の中で未発見の建物跡の発見が期待される。

南側調査区では、竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡1棟、溝跡7条、土坑30基、柱穴跡を134穴確認した。また古墳時代終末期から平安時代にかけての遺物が多数出土している。

南側調査区で発見された遺構で特徴のあるものを記すと、奈良時代と考えられるSI012竪穴建物跡では、カマドより完形の土師器甕が2個体出土している。また同様に奈良時代のSI017竪穴建物跡では、床面、および遺構内の堆積土中から大量の遺物が出土している。そしてSI023竪穴建物跡からは、東海地方で生産された可能性がある須恵器の円面甕が出土した。掘立柱建物跡は調査区中央付近でSB002掘立柱建物跡が確認されている。この遺構は各柱穴跡の掘方が一辺1mほどを測



第3図 原遺跡第1次調査全体図



北側調査区 全景（北西から）



SI002 竪穴建物跡（南から）



SI003 竪穴建物跡（南から）



SI001 遺物出土状況（南から）



南側調査区 全景（北西から）



大型の柱穴列（北西から）



円面破出土状況（南から）



SD012 遺物出土状況（西から）

第4図 第1次調査の状況

り、形状は方形であることから官衙的な施設の中でも中枢的な機能を有した建物である可能性が高く、遺跡の性格を考える上では極めて重要な意味を持つ遺構である。溝跡では調査区南側で確認されたSDO12、SDO13溝跡が注目される。SDO12溝跡は東西方向に延びるものであるが、遺構内より奈良時代頃と考えられる須恵器壺片が集中して発見されている。またSDO12溝跡より古いSDO13溝跡は、上幅が約2.5mを測るものであり、さらに3時期ほどの変遷が認められることから、古墳時代に營まれた集落の外側を囲う堀のような機能も考慮できる。

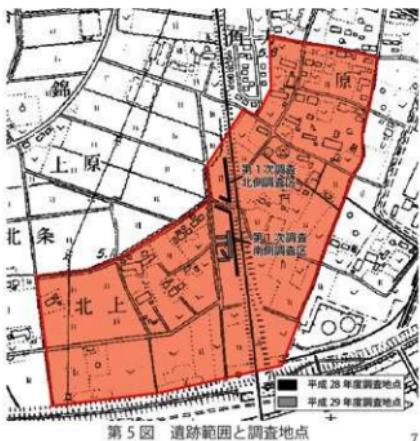
以上のように原遺跡の調査成果からは、この地に古墳時代後期頃から集落が營まれ、それが古墳時代終末期から奈良時代にかけて官衙的な性格を有する施設へと変貌することを推定できるようになった。この官衙的な性格を有する遺構を考える上で考慮すべき事柄は、遺跡の所在する玉崎地区では『延喜式』で記載される「玉前駅家」、または多賀城跡より出土した木簡に記される「玉前刻（開）」（宮城県多賀城跡調査研究所：1985）の存在が、予てより比定されていたことである。もとより第1次調査の調査面積は極めて限定されたものであることから、発見された遺構・遺物からこれらの施設と即断することは困難であるが、今後も計画的・継続的に調査をする中で、遺跡の性格・規模・構成を明らかにすることが強く望まれている。

第2節 第2次調査に至る経緯

第1次調査の成果を受けて、岩沼市では原遺跡を重要遺跡として認識し、将来的には市、さらには県などの史跡化を目指すことへの検討をはじめた。それにはまず、遺構・遺物が分布する範囲、時期ごとの遺構群の配置・変遷をはじめとする、より詳細な遺跡の構成内容を把握することが必要であると考え、岩沼市教育委員会生涯学習課ではこのための調査費用を平成29年9月議会に補正予算の計上を行った。議会での審議を経て予算案が可決・成立したことを受け、土地所有者、および農事組合法人原生産組合へ調査へのご理解とご協力をお願いたところ、幸いにもご快諾を頂いた。そこで第2次調査を稲の収穫が終了する平成29年11月1日より開始することとし、機材の準備や調査作業員の手配など準備を進めた。

第3節 調査方法と調査経過

第2次調査の目的は、第1次調査の南側調査区で確認された官衙的な様相を呈する大型の掘方を有する柱穴をはじめとする遺構群が、さらに西側へ展開するのか、という点に重点を置いた。このため調査区の設定は1トレンチを第1次調査区に並行した南北方向に設定し、2~4トレンチはこれに直交するように東西方向で設定した。各トレンチの規模は1トレンチが長さ40mで幅が4m、2~4トレンチは長さ14mで幅が4mである。しかしながら、2トレンチ東側の調査中



第5図 遺跡範囲と調査地点

に材木塀であるSA1が確認されたことを受け、材木塀の延長線上となる北側部分において新たに調査区（2トレンチ拡張部）を設定し、可能な限り詳細把握に努めた。

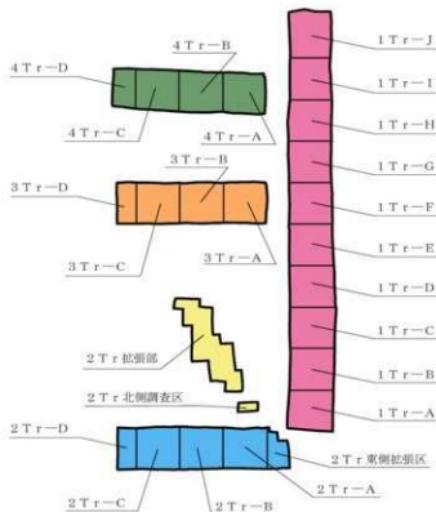
平成29年11月1日より重機等の搬入を実施し、その後1トレンチより重機を用いた表土掘削を開始した。重機による表土掘削は水田耕作土、および阿武隈川によって運搬された土砂を母材とした耕作土の除去までとし、その後は人力で遺物を包含する土層の掘り下げ、精査を実施し、遺構の平面確認に努めた。この遺物包含層の掘り下げに際しては、各トレンチごとにグリッドを設定し、遺物を取り上げている（第6図）。なお、今回の調査は前述のとおり遺構の分布把握を目的としており、遺構保存の観点から遺構の掘り下げ・半裁はごく一部にとどめている。また調査では隨時デジタルカメラによる写真撮影、土層断面図等の作成を行い、12月13日にドローンによる空撮をし、12月28日に現地調査を終了した。

遺構の平面測量に際しては、第1次調査との整合性をはかるために岩沼市が設置した2級基準点、および圃場整備事業の際に設置された3級基準点を使用した。使用した基準点それぞれの名称・座標数値は以下の通りである。なお、岩沼市設置の基準点数値については、国土地理院がweb上で公開している「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」による地殻変動を補正するパラメータファイルを用いて補正を行った数値である。

岩沼市2級基準点 2-066 X : -212501.506 Y : 1615.862

圃場整備事業3級基準点 H 27-3-04 X : -212659.005 Y : 1627.007

調査中には宮城県教育庁文化財保護課、多賀城跡調査研究所、岩沼市史編纂専門部会の考古部会、および古代・中世部会などをはじめとする多数の方々が来跡し、様々な助言等を頂いている。



第6図 第2次調査における遺物取上げグリッド設定図

第3章 調査の概要

第1節 基本層序

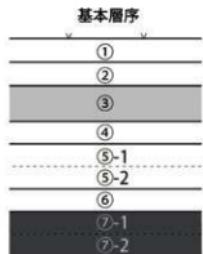
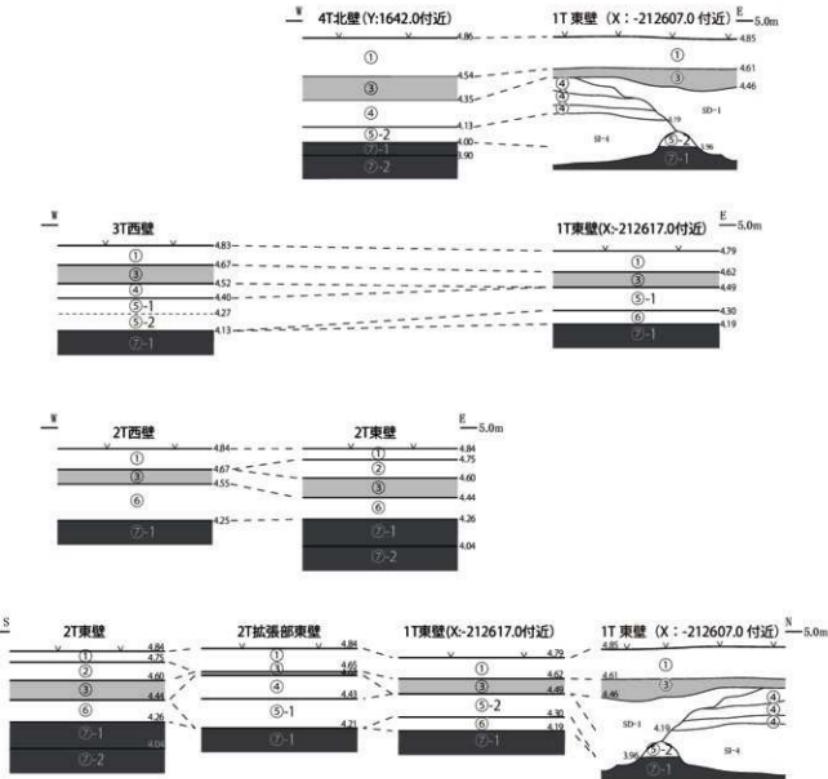
調査区内の土層柱状図を示し、遺跡の基本層序を示す（第7図）。調査区の現況は水田で、標高4.80～4.85mである。阿武隈川に近い南側の水田は一段高く、また西側の水田、および畠も標高が高くなっている。平成28年度の圃場整備により改変を受けているが、概ね北へ向かって傾斜しており、わずかながら東へも同様に傾斜している。①耕作土の厚さは10～30cmである。②褐色シルト層を部分的に挟み、その下には③黒褐色～暗褐色～灰黄褐色を呈するシルト層が見られるが、このシルト層は古代の遺物を多く含み調査区全域で確認できる。④にぶい黄褐色シルト層、⑤褐色～灰黄褐色砂層、⑥にぶい黄褐色シルト層を20～40cmの厚さで挟み、⑦黒色粘土層とさらに褐色粘土層がある。古代以前の自然堤防形成層と考えられ遺物を含まない。⑦層は北へ向かってわずかに傾斜するが、X-212617.0付近で傾斜を強め、1トレンチ北端では調査の範囲内では確認できないほど深く下がる。平成28年度の第1次調査で、X-212588.0付近から褐色粘土が、X-212582.0付近から黒色粘土を確認しており、この間約40mの深い谷地形が存在すると考えられる。④・⑤・⑥層は、⑦層が形成する深い谷を埋めながらも依然として若干の北側への傾斜を維持し、谷部分では⑤砂層が厚く堆積している。これらの層は遺跡の立地する場所が度々洪水の被害を被る場所であることを示し、また遺跡廃絶後に阿武隈川によって運搬された土砂である②層によって遺跡が良好に保存してきたと言える。

遺構検出面は、1トレンチ東壁（X-212607.0付近）土層柱状図に見られるとおり、③遺物を包含するシルト層を除去した④にぶい黄褐色シルト層上面、さらに⑤砂層上面の2面がある。第1面で検出される遺構は、1トレンチSD1や3トレンチP66～69のように埋土に十和田a火山灰を含むことから10世前葉以前のもの、第2面で検出される遺構はさらにそれ以前のものと言える。標高が高い南西寄りでは削平を受けたためか④層もしくは④層と⑤層いずれも確認されず、⑥層上面が遺構検出面となる。

調査では、①層・②層を重機により除去した後③層を人力で掘削し、④層上面、および⑤層（あるいは⑥層）上面での遺構確認を心掛けたが、遺構埋土との識別が難しく、部分的に⑦層上面まで下げて遺構を確認した。

第2節 発見された遺構

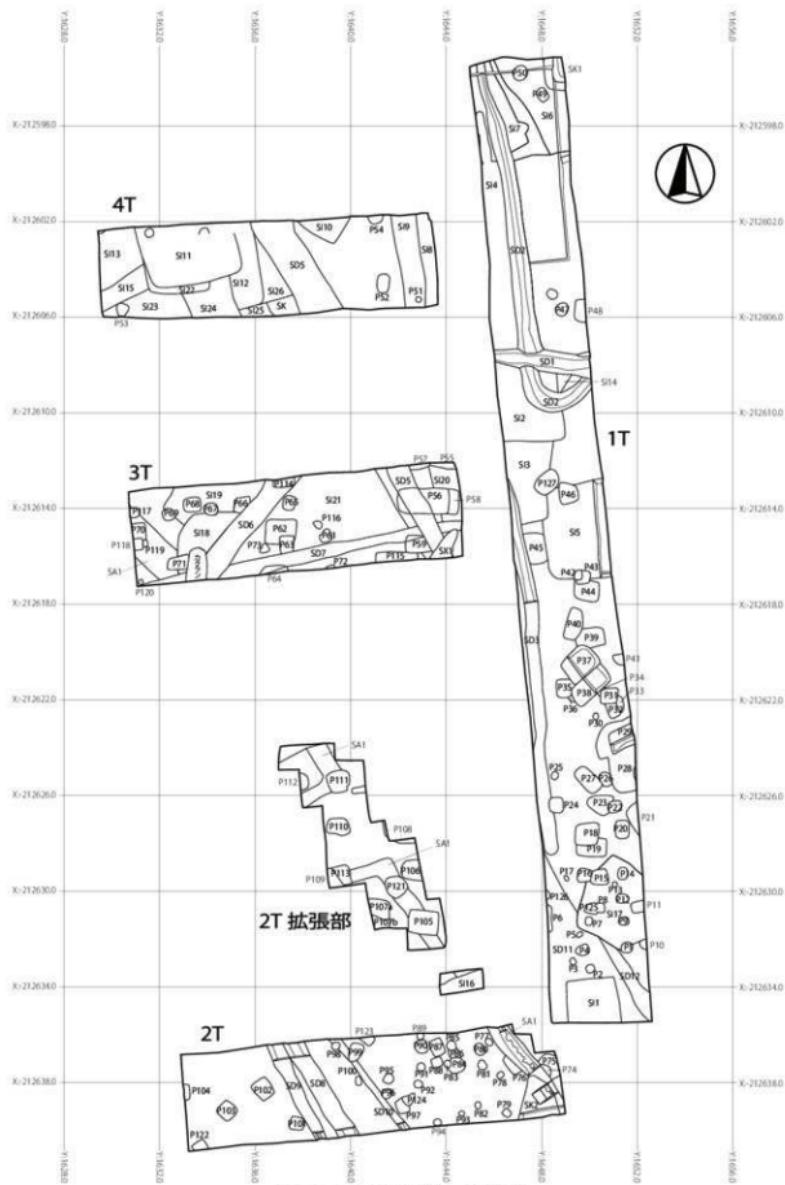
調査の結果確認した遺構は、竪穴建物跡26棟、掘立柱建物跡3棟、柱穴跡126穴（掘立柱建物跡含む）、材木痕跡1条、溝跡10条、土坑2基である。掘立柱建物跡は組み合わせの確実なもののみで、他は柱穴跡とした。出土した遺物は、土師器、須恵器、金属製品（刀剣類の鞘口金具）、石製品（砥石・石製模造品）等である。以下に各遺構種別ごとに概略を示す。



基本層序土層注記

- ① : 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト。酸化鉄粒含む。しまり強い。粘性やや強い。表土(水田耕作土)。
- ② : 10YR4/4褐色シルト。10YR4/1褐色シルト粒含む。しまりやや強い。粘性やや強い。水田耕作土。
- ③ : 10YR3/1黒褐色~10YR3/4暗褐色~10YR4/2灰黄褐色シルト。しまりやや強い。粘性やや強い。遺物包含層。
- ④ : 10YR4/3にぶい黄褐色シルト酸化鉄粒少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
- ⑤-1 : 10YR4/4褐色粗砂。しまり弱い。粘性弱い。
- ⑤-2 : 10YR4/2灰黄褐色細砂。しまり弱い。粘性弱い。
- ⑥ : 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。しまり強い。粘性やや強い。
- ⑦-1 : 10YR2/1黒色粘土。しまり強い。粘性強い。
- ⑦-2 : 10YR4/6褐色粘土。しまり強い。粘性強い。

第7図 基本層序 (1/40)



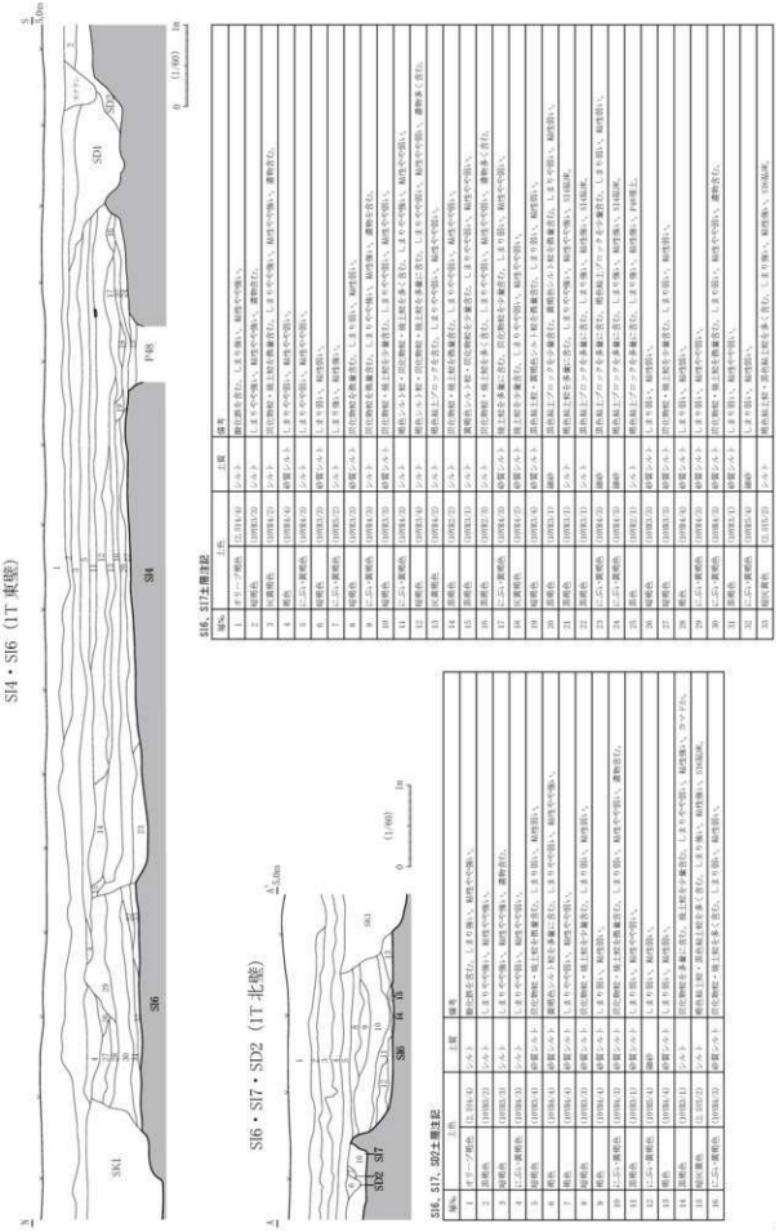
第8図 第2次調査全体図 (1/200)

竪穴建物跡

竪穴建物跡は26棟を確認した。1トレンチ北半と3トレンチ、4トレンチに密集する。柱穴跡が南半に集中するのとは対照的に竪穴建物跡は地山の標高の下がる北部に集中する。幅の狭いトレンチ調査であること、重複が激しいこと、遺構保護の観点から遺構の掘り下げを実施していないことから建物跡のプランの確認や重複関係の把握が満足にできなかった。平面形は



第9図 竪穴建物跡位置図 (1/200)



第10図 SI4、SI6、SI7、SD2 土層断面図 (1/60)

いずれも方形で、一部サブトレレンチを設置して確認したところ、地山砂層・黒色粘土・褐色粘土による貼床を施している。主軸方位は推定不可能な5棟を除き、ほぼ真北となるもの4棟、N-8°～9°-Wが4棟、N-12°～16°-Wが4棟、N-25°～32°-Wが5棟、N-51°～59°-Wが4棟となる。カマドはSI2とSI4の北壁において、遺構検出面で確認している。SI2は煙道部がSD1で壊されている。SI4カマドは北壁に長大な煙道部が確認された。SI4は一辺約8mの規模を有する大型の建物跡で、サブトレレンチを設置して断面の観察を行ったが複数の建物跡の重複は見られず、現状では竈屋等の大型の建物跡の可能性を考えておきたい。竪穴建物跡と掘立柱建物跡や柱穴跡との新旧関係は概ね柱穴跡が新しいが、SI4の貼床下からP48を確認しており、竪穴建物跡よりも古い掘立柱建物跡も存在している。



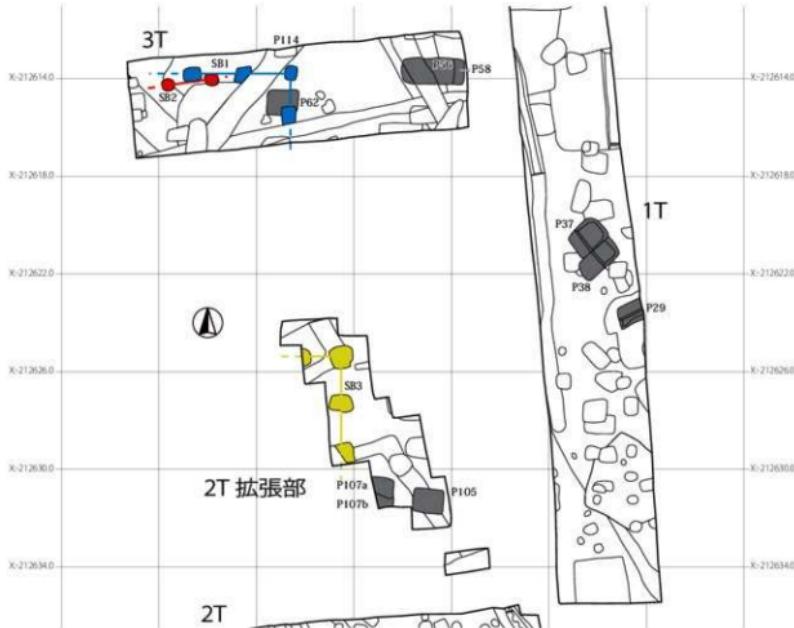
第11図 SI11、SI12、SI13、SI26、SD5 土層断面図 (1/60)

掘立柱建物跡

多数確認された柱穴跡のうち、現段階で確実に組み合わせが確認され掘立柱建物跡とできるものは、3トレンチで確認されたSB1、SB2、2トレンチ拡張部で確認されたSB3のみである。

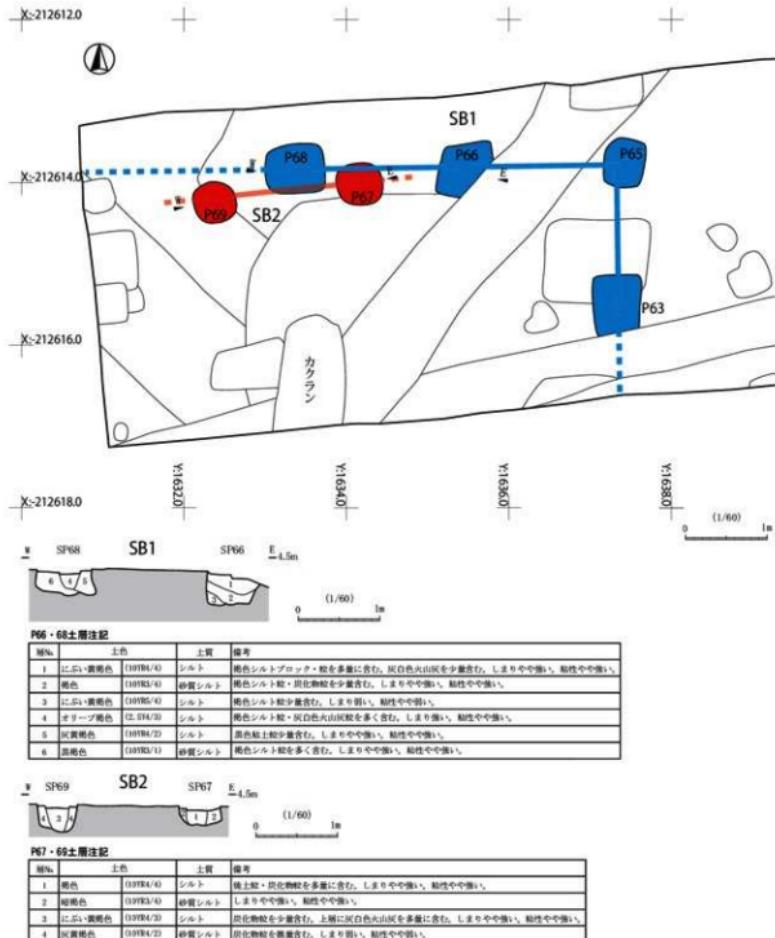
SB1は、 2×1 間が確認された側柱建物跡で南、および西側に建物が延びると考えられる。南北方向の主軸方位はほぼ真北である。柱穴跡の平面形は方形、および長方形で、規模は一辺 $0.6 \sim 0.7m$ である。東西方向の柱間寸法は $1.95m$ 、および $1.90m$ 、南北方向の柱間寸法は $1.80m$ である。P66・68で半截を実施した。確認面から掘方底面までの深さは $34 \sim 40cm$ を測り、P68で柱痕跡が確認された。P66の1層、およびP68の柱痕跡には十和田a火山灰が含まれる。新旧関係はSD6より古く、SI18・19より新しい。

SB2は1間分が確認された建物跡である。柱穴跡の平面形は円形、および隅丸方形で、規模は直径約 $0.5m$ である。東西方向の柱間寸法は $1.70m$ である。P67・69で半截を実施した。確認面から掘方底面までの深さは $23cm$ を測り、柱痕跡が確認されたが、P69の柱痕跡には十和田a火山灰が多量に含まれる。切合い関係はSI18・19より新しい。SB1・2は埋土に十和田a火山灰を含むことから10世紀前葉以前の廃絶とすることができ、また調査区西側で認められていることから遺跡の範囲、特に掘立柱建物跡を含む官衙的な性格を有する施設が西へと広がることを示唆している。



第12図 掘立柱建物跡および半截実施柱穴跡位置図 (1/200)

SB3は2トレンチ拡張部で2×1間分を確認した建物跡で南、および西側に延びると考えられる。南北方向の主軸方位はほぼ真北である。柱穴跡の平面形は方形または不整方形で、規模は一辺0.65～1.0mである。南北方向の柱間寸法は1.88m、および2.4mである。半蔵は実施していないが、確認面で柱痕跡を認めている。切合い関係はP109より古く、SA1より新しい。

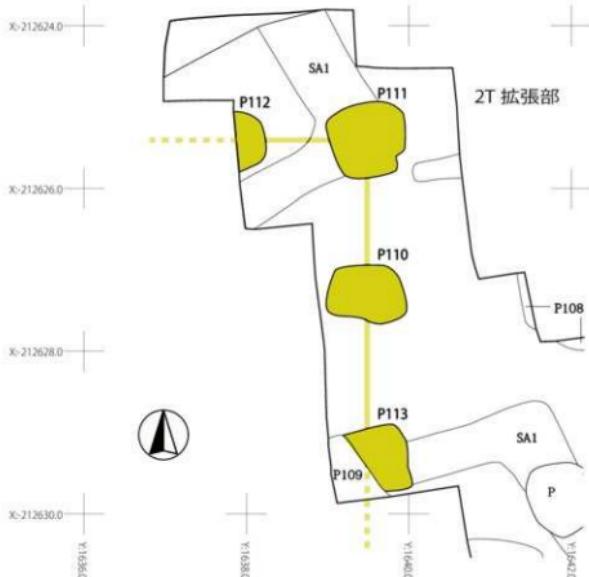


第13図 挖立柱建物跡 SB1・SB2 (1/60)

柱穴跡

柱穴跡は、掘立柱建物跡したものも含めて 126 穴が確認された。1 トレンチ南半と 2 トレンチ、2 トレンチ拡張部、3 トレンチに集中する。なかでも大型の柱穴跡は 1 トレンチ南半と 2 トレンチ拡張部、3 トレンチに集中する。平面形別では長方形 43 穴、円形 33 穴、方形 23 穴、不整方形 17 穴、隅丸方形 5 穴、不整円形 4 穴、楕円形 1 穴である。平面規模で一辺が 1.0m 以上のものは 23 穴、一辺 0.7 ~ 1.0m のものは 20 穴である。一辺が 1.0m 以上のものはすべて平面長方形、一辺 0.7 ~ 1.0m のものは平面方形 9 穴、長方形 6 穴、不整方形 4 穴、円形 1 穴である。平面長方形・方形・不整方形を合わせた数は 83 穴で全体の 65.8%、平面規模 0.7m 以上のものは 43 穴で全体の 34.1% を占める。平面長方形の柱穴跡の主軸方向は、東西もしくは若干北に振れており、掘立柱建物跡の主軸方向は真北か、40°程度西に振れているものと考えられる。

平面規模が一辺 0.7m 以上の大型の柱穴跡 9 穴で半截を実施し、埋土の観察と掘方規模の確認を行った。平面形はいずれも長方形で、規模は P29:0.8 × 1.0m 以上、深さ 0.61m、P37:1.1 × 1.4m、深さ 0.72m、P38:0.9 × 1.8m、深さ 0.52m、P56:0.7 以上 × 1.05m、深さ 0.64m、P58:1.0 × 1.4m、深さ 0.73m、P60:0.65 以上 × 0.7m 以上、深さ 0.65m、P62:1.0 × 1.25m、P105:1.0 × 1.2m、深さ 0.71m（柱部分 0.81m）、P107:0.55 以上 × 0.8m、深さ 0.65m、



第 14 図 捜立柱建物跡 SB3 (1/60)



第15図 柱穴跡土層断面図 (1/60)

P114 : 0.35 以上 × 0.9m、深さ 0.66m である。掘方の断面形は、P56 がスロープ状、P58 が階段状を呈する。P105 では柱痕跡が確認でき、掘方底面の柱位置だけをさらに一段掘り下げている。掘方埋土は、基本層序⑤～⑦の砂層・黒色粘土・褐色粘土を混合して用いている。

一辺 1m を超える大型の柱穴跡は 1 トレンチ中央、2 トレンチ拡張部、3 トレンチに集中しており、今回調査していない 2 トレンチ北側から 3 トレンチにかけてのエリアに官衙関連施設の中心的建物跡が存在することが予想される。またこれらの大型の柱穴跡は南北軸が真北、もしくは N-40°-W の傾きを示すものがある。材木堀跡 SA1 の主軸方位が N-40°-W を示しており、同時期の建物跡の可能性がある。また真北を志向する SB3 や P105、P107 が材木堀 SA1 を切っており、後続する中心的建物跡が主軸方位を違えるなど、施設内で大きな構造の変化が起きていることが考えられる。

材木堀跡

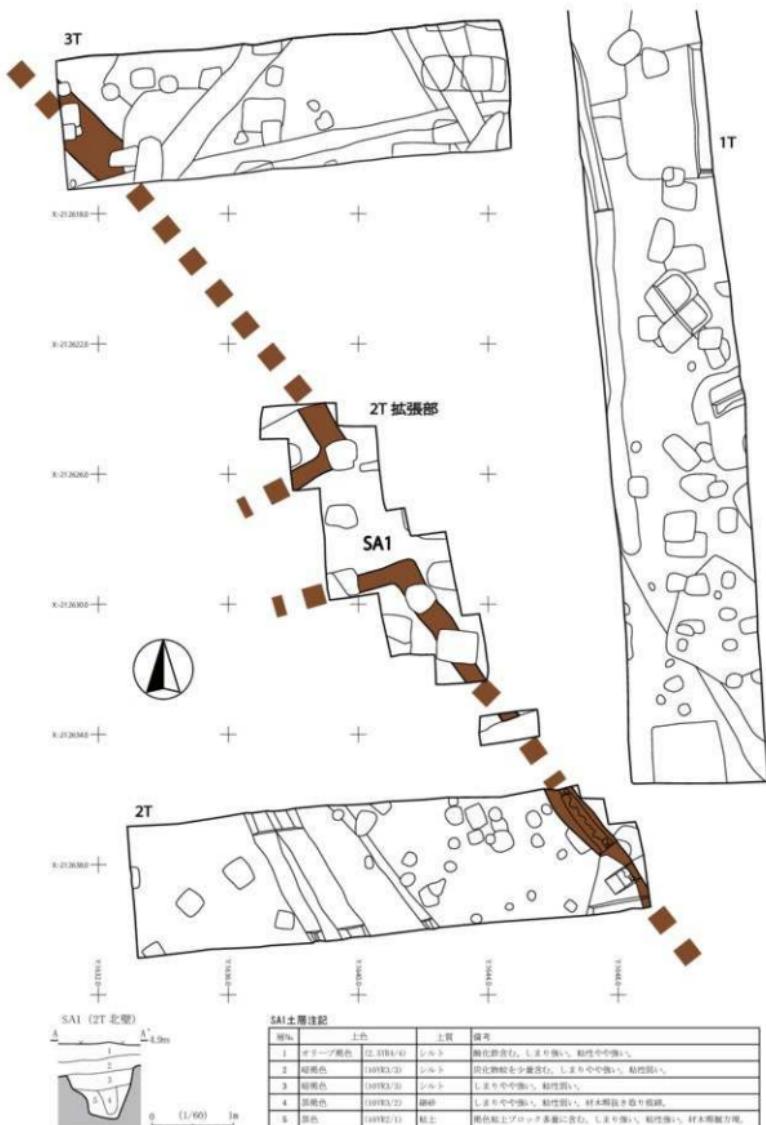
材木堀跡 SA1 を 2 トレンチ、2 トレンチ拡張部、3 トレンチで確認した。上幅 0.8m、下幅 0.35m の断面逆台形、深さ 0.6m の布堀状の掘方に黒色粘土・褐色粘土による掘方埋土と材木抜取痕跡を確認した。柱根は遺存していない。抜取痕跡、および遺構底面の形状から、材木は直径 10cm 前後の丸太材の先端を尖らせて杭状に打ち込んだものと考えられる。2 トレンチから北西に直線的に延び、2 トレンチ拡張部で L 字に南西に向かって屈曲する。3.4m の空闊地を挟み同様に L 字に屈曲する材木堀跡が北西に延びる。この 2 本の屈曲する材木堀跡は同一軸線上にあることから、同時期に区画施設として機能していたものと考えられる。材木堀跡の主軸方位 N-40°-W である。検出した総長は北端から南端までで 31m である。重複関係は掘立柱建物跡 SB3、大型の柱穴跡 P105、P107 より古い。柱穴跡の項でも記したとおり平面長方形、一辺 1m を超える大型の柱掘方をもつ掘立柱建物が同時期に存在した可能性がある。

溝 跡

溝跡は 10 条を確認した。このうち SD6 は基本層序③の遺物包含層を切り込む新しい溝跡である。SD1 は主軸方位 N-85°-W の溝跡で、埋土に十和田 a 火山灰を含む。SD2 は主軸方位 N-8°-W の溝跡で東へ屈曲する。重複関係は SD1 より古い。SD3 は竪穴建物跡 SI3 より新しい。SD5・8・9・10 の主軸方位はそれぞれ N-36°-25°-30°-37°-W で、材木堀跡 SA1 と近い主軸方位を示しており、小規模な区画溝の可能性が考えられる。重複関係は SD5 が柱穴跡 P56 より新しく、SD10 は P99 より古い。SD11 は第 1 次調査で確認した SD13 の延長にあたる。

土 坑

土坑としたものは SK1 と SK2 がある。SK1 は 1 トレンチ北東隅で確認し SI6 を切っている。人為堆積と考えられるにぶい黄褐色シルトと、暗褐色砂質シルトが交互にみられ、遺物を含む。SK2 は材木堀跡 SA1 より新しい土坑である。



第16図 材木塀SA1 平面図(1/150) 断面図(1/60)

第3節 発見された遺物

今回の調査では平箱で総数13箱の遺物が出土しており、その大半は遺構検出作業中に出土したものである。遺物の多くが古代の土師器や須恵器であり、他に土製の支脚、鉄製品、鉄滓、銅製品、砥石、剝片などが出土している。今回の概要報告書の作成にあたり、現時点で図示できた遺物を中心に概要を述べる。

竪穴建物跡出土の遺物

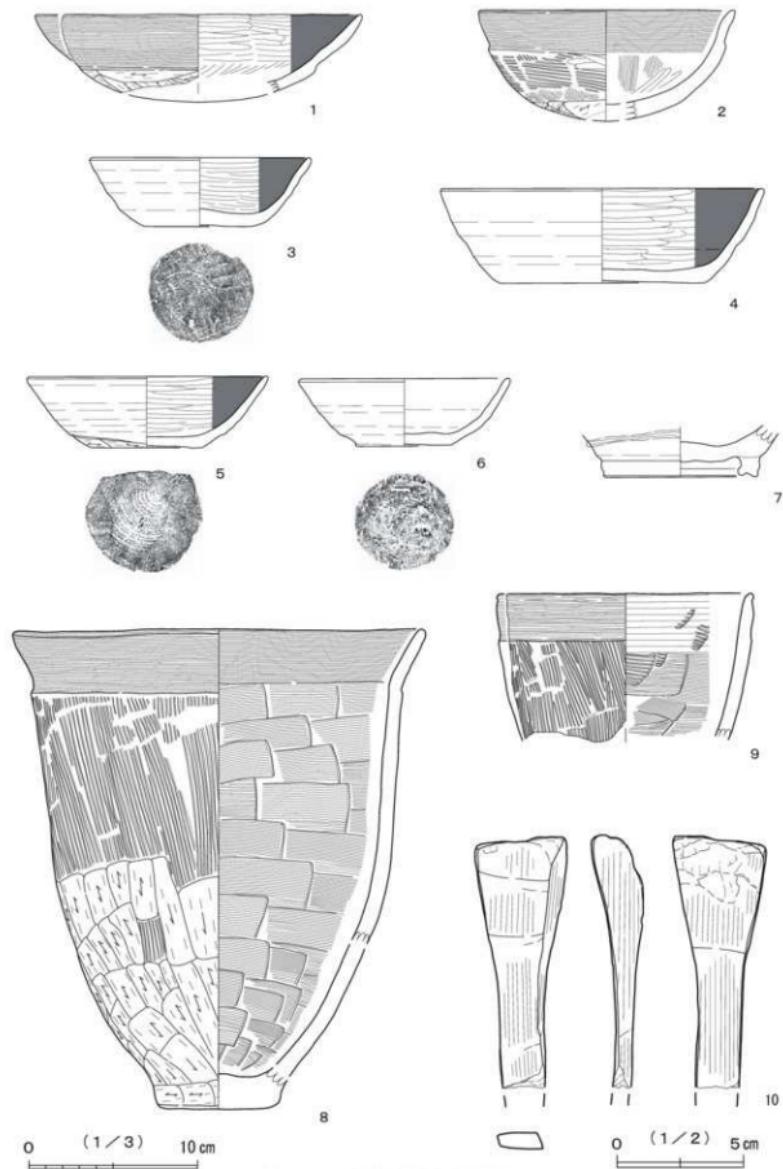
竪穴建物跡からは土師器や須恵器、土製の支脚、砥石などが出土している。これらの大半は遺構の確認作業中に各遺構の埋土上層から出土したものが多く、竪穴建物跡の時期が決定できる資料は極めて少ない。

出土した土師器には製作にロクロ不使用のもの（以下、非ロクロ土師器と表記）とロクロ使用のもの（以下、ロクロ土師器と表記）があり、前者が圧倒的に多い。非ロクロ土師器の器種には壺、鉢、甕などがあり、ロクロ土師器の器種には壺と甕がある。須恵器には壺、甕、瓶類などの器種があるが、量的には少ない。支脚はカマドで使用されたものと考えられ、表面が面取りされて角張っている。

図示できた資料は土師器が7点、須恵器が2点、砥石が1点である。1はSI25上面から出土した非ロクロ土師器の壺である。丸底で外面の体部下位に段をもち口縁部が内弯する器形で、内面にミガキ・黒色処理が施される。2・8・9はSI6の床面に近い埋土から出土した非ロクロ土師器である。2の壺は塊に近い器形のもので、体部上位に段をもち、外面がハケメ調整のものである。8の甕は1個体が横位に倒れた状態で出土した。頸部に段をもち、体部外面はハケメとヘラケズリ、体部内面はヘラナデ調整されている。この土器内部からは焼けた骨片が検出された。この骨片の同定については今後の課題としたい。9は頸部外面に軽い段をもち、口縁部が直立気味に立ち上がる鉢で、体部外面はハケメ調整、内面はハケメ、ヘラナデ調整されている。SI12から出土した3と4はともにロクロ土師器の壺であり、底部外面のほぼ全面で手持ちヘラケズリの再調整が行われている。このSI12を切っているSI11からは5のロクロ土師器壺、7の須恵器瓶類が出土している。5は回転糸切り後に周辺のみ再調整が施される。また7は各所に自然釉が掛かる。SI16出土の須恵器壺である6は、底部切り離しが回転糸切りで、その後の再調整が見られないものである。なお、10の砥石が出土したSI4からはロクロ不使用で壺の体部下位、甕の頸部に段を持つ土師器が多く出土している。

掘立柱建物跡出土の遺物

3棟の掘立柱建物跡が確認されており、構成する柱穴跡のいくつかから土器破片が少量出土している。SB1のP63とP66では、非ロクロ土師器で体部に軽い段を持つ壺や、頸部に段のない甕が確認される。またSB2のP69からはロクロ土師器の甕が出土している。これらP66の埋土上層とP69の柱痕跡からは10世紀前葉に降下したとされている十和田a火山灰が検出されており、建物跡はそれ以前の時期のものと考えられる。またSB3のP110からは非ロク



第17図 積穴建物跡出土遺物実測図

表2 段穴跡出土遺物観察表

番号	遺構・部位	種別	面種	外 面	内 面	残 在	法寸(cm)			写真番号
							口径	底径	高さ	
1 SD-25	土器器	环	ロコナデ・ハラケズ(只一端へラケギ)		ヘラケギ・黒色處理	口縫底へ体部1/6	19.4(確定)			写真10
2 SD-6	土器器	环	ロコナデ・ハラケギ・ナダヘ・ラケギ・ヘラケギ		ロコナデ・ナダヘ・ラケギ	全体の1/2	15.3	6.9(確定)		写真10
3 SD-12	土器器	环	ロクロナデ・ロコナデ(只一端はほぼ全周手持ちへラケズ)		ヘラケギ・黒色處理	全体の1/2	13.2	4.8	4.1	写真10
4 SD-12	土器器	环	ロクロナデ・ロコナデ(只一端はほぼ全周手持ちへラケズ)		ヘラケギ・黒色處理	全体の1/2	19.2	12.2	5.8	写真11
5 SD-11	土器器	环	ロクロナデ・ロコナデ(只一端はほぼ全周手持ちへラケズ)(只中側に切妻)		ヘラケギ・黒色處理	全体の1/4	14.2	6.7	4.2	写真11
6 SD-16	陶器器	环	ロクロナデ・手持へラケズ(只切妻)		ロクロナデ	全体の2/3	12.6	5.6	4.0	写真10
7 SD-11	铁器器	瓶	ロクロナデ・口縫あわせ・再調整なし		ロクロナデ	底部のみ				写真11
8 SD-6	土器器	瓶	ロコナデ・ハラケム・ハラケズ		ロコナデ・ハラケズ	体部の一部欠損	24.5	7.0	28.5	写真12
9 SD-6	土器器	瓶	ロコナデ・ハラケム		ロコナデ・ハラケム・ハラケズ・黒色處理	口縫底へ体部1/6	15.2(確定)			写真12
番号 遺構・部位 種別				特 徴		残 在	法寸(cm)			写真番号
10 SD-4	埴 土	板	板方型の柱跡をなす。4面とも使用されており、中央部は縦の割れ、扁平化している。研磨の跡材で、付上げ跡がみられる。一端底欠損			口縫底	19.9	3.4	1.9	写真12

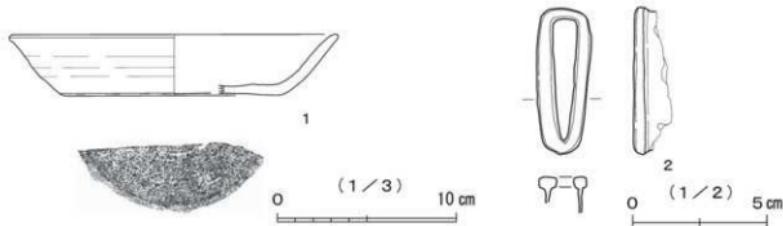
口土師器の甕が出土している。

柱穴跡出土の遺物

柱穴跡の段下げ時や半截時に少量の土師器や須恵器が出土しているが、多くは小破片である。土師器では非ロクロ土師器の环や甕が各柱穴跡の出土遺物として多数確認される。环では体部下位に段を持ち、内面がヘラケズリ・黒色処理のものが多く、ほかに口縫部に稜を持ち、内面が黒色処理されないものも認められる。甕では頸部に段を持つものと持たないもの、体部調整がハケメ主体のものとヘラナデ・ヘラケズリ主体のものみられる。P107はP105に匹敵するほどの堀方の規模が大きい柱穴跡とみられるが、その堀方埋土中から非ロクロ土師器の甕が出土している。外面はヘラナデとヘラケズリ、内面はヘラナデとナデ調整のものである。須恵器の出土量は少ないが、环や甕、瓶類が確認される。环では底部切り離しが回転ヘラ切りによるもの、その後に回転ヘラケズリの再調整が行われているものがある。図示した1は堀方の長辺が1.8mという規模の大きいP38の柱穴跡から出土したもので、口径に比して底径が大きく、直線的に立ち上がる須恵器环である。底部は全面に回転ヘラケズリの再調整が施されている。甕では口縫部に波状沈線の装飾を持つものがあり、また瓶類には東海地方の製品の可能性のあるものも含まれている。金属製品の2はP38の堀方埋土から出土した刀劍類の鞘に用いられる銅製の口金具である。

溝跡出土の遺物

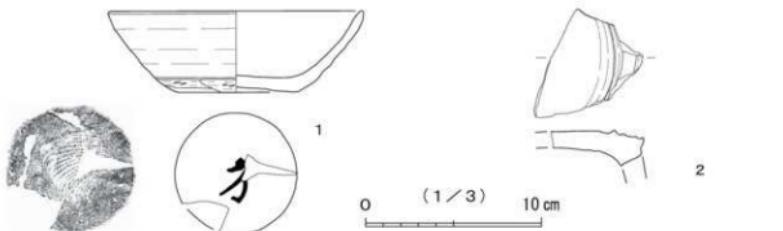
SD 1・2・3・5・7・8の溝跡から土師器や須恵器、鉄製品が少量出土している。土師器は非ロクロ土師器とロクロ土師器が見られる。非ロクロ土師器の器種では环と甕があり、これらの整形技法の特徴は前述の遺構出土遺物と共通している。ロクロ土師器の环では底部が回転糸切りによって切り離した後の再調整がないものがあり、これは溝跡埋土に10世紀前葉に降灰したと考えられている十和田a火山灰が混入するSD 1から出土している。須恵器の器種には环、高环、甕、瓶類、円面鏡があり、口縫部に波状沈線を持つ甕、東海地方製品や福島県会津若松市周辺で操業していた大戸窯跡群の製品とみられる瓶類なども含まれている。鉄製品は刀子とみられる。



第18図 柱穴跡出土遺物実測図

表3 柱穴跡出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	外 面		内 面	残 存	法量(cm)			写真番号
				口径	底径			長さ	幅	脚高	
1 P38	須恵器	环	ロクロナダ-全面回転ヘラケズリ-縫合あり。	ロクロナダ	全体の1/3	18.4	12.2	3.4	回版12		
2 P38	口金具	銅製	刀剣類の鞘口金具。	一部欠損		5.5	2.0	0.3	回版13		



第19図 溝跡出土遺物実測図

表4 溝跡出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	外 面		内 面	残 存	法量(cm)			写真番号
				口径	底径			長さ	幅	脚高	
1 SD2	須恵器	环	ロクロナダ-回転系切り後に体部下方と底部周辺に手持ちヘラケズリ。底部中央に「方」字彌字がある墨書きあり。	ロクロナダ	全体の2/3	14.6	7.0	4.6	回版13-14		
2 SD2	須恵器	円面鏡	ロクロナダ。陸部と海部の境に低い突堤(内堤)をもつ。外堤は欠損。脚部に透かしあり。海部付近には自然軸が認められる。	ロクロナダ	鏡部破片						回版14

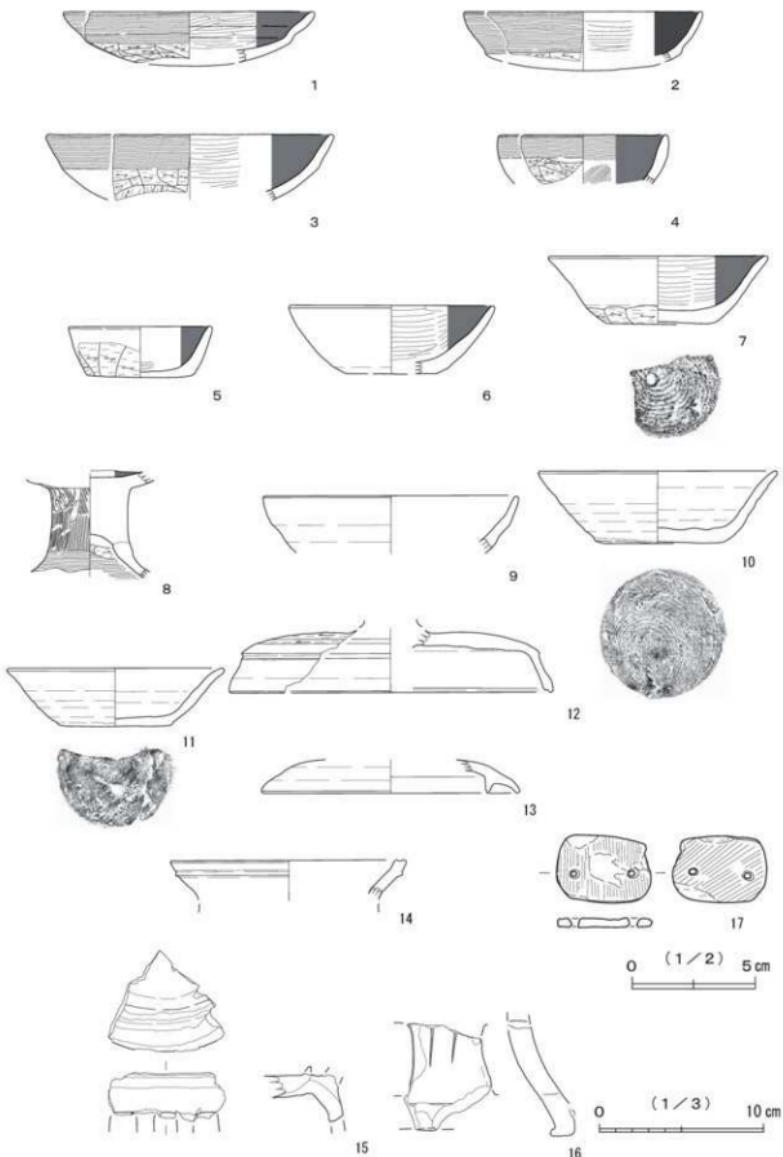


第20図 土坑出土遺物実測図

表5 土坑出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	外 面		内 面	残 存	法量(cm)			写真番号
				口径	底径			長さ	幅	脚高	
1 SK1	土器	环	ロクロナダ-底部剥離部に回転系切り痕。高台付环の可能性もある。	ロクロナダ-黒色処理	全体の1/4			14.0	7.0	4.6	回版14

図示した資料の1はSD 2の埋土から出土した須恵器の环で、回転系切りで底部を切り離した後に体部下端から底部周辺にかけて手持ちヘラケズリの再調整を施している。底部中央には「方」という墨書きが認められる。2もSD 2の埋土から出土した須恵器の円面鏡である。陸部と海部の境に低い内堤をもち、脚部には透かしを持つものである。外面の海部以外には自然軸が掛かっている。



第21図 その他の出土遺物実測図

表 6 その他の出土遺物観察表

番号	地区・層位	種別	基盤	外面	内面	残存	法線(cm)		写真番号
							口径	底径	
1	LT-K区 土器窯	所	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/6	15.6幅27			SD0014
2	AT-C区 土器窯	所	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/12	14.6幅27			SD0014
3	LT-G区 土器窯	所	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/12	17.6幅27			SD0014
4	LT-G区 土器窯	所	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/10	19.6幅27			SD0014
5	AT-D区 土器窯	所	ヘラケズリ、器底切離、口縫製作不規則	ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/2弱	8.8	6.6	3.3	SD0015
6	2T-北東隅区 土器窯	所	ヨクナデ・底部切離、不明、手持ち・ハケズリ・背面調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/4	17.8	5.8	4.5	SD0015
7	AT-C区 土器窯	所	ヨクナデ・ヘラケズリ・器底切離後に周縁3段落ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/3	12.4	6.6	4.2	SD0015
8	AT-G区 土器窯	所	ヨクナデ・ヘラケズリ・脚底下部に無い段を持つ	ヘラミガキ・黒色処理	脚底の心臓部				SD0015
9	AT-D区 土器窯	所	ヨクナデ・体部に脚底あり	ヨクナデ	口縁部～体部1/10	15.6幅27			SD0016
10	AT-C区 土器窯	所	ヨクナデ・底部に脚底あり・背面調整なし	ヨクナデ	口縁部～体部1/3	14.6	8.0	4.4	SD0016
11	LT-H区 土器窯	所	ヨクナデ・底部に脚底あり・口縫に足跡もヘラケズリ	ヨクナデ	口縁部～体部1/3	13.3	7.6	3.6	SD0016
12	2T-D区 土器窯	所	ヨクナデ・底部に脚底あり・つまみは矢張	ヨクナデ・斜斜板(?)あり	器底1/6	19.6幅27			SD0016
13	AT-I区 土器窯	所	ヨクナデ	ヨクナデ・カヌリモチ	口縁部1/8	15.6幅27			SD0016
14	AT-C区 土器窯	所	ヨクナデ・部分的に自然剥離か	ヨクナデ	口縁部1/8	14.6幅27			SD0016
15	AT-F区 土器窯	円筒窯	ヨクナデ・脚底に複数の凹みあり、内外端に欠損	アラ美濃・ヨクナデ	脚底破片				SD0016
16	2T-東北隅区 土器窯	円筒窯	ヨクナデ・脚底に複数の透かしあり、内面に指紋あり。	ヨクナデ	脚底破片				SD0017

番号	構造・層位	種別	特徴	残存	法線(cm)			写真番号
					高さ	幅	厚さ	
17	ST-AE-01	石製削込品	やや彫り丸形に近いが、開口とみられる。一部に刮削面が残るが、表面、周縁に少しがれ、浮石質。	空芯	3.9	2.7	0.4	SD0017

土坑の出土遺物

1 トレンチ北東隅のSK 1からは1のロクロ土師器環が出土している。底部切り離しは回転糸切りで、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

その他の出土遺物

重機による掘削中や遺構検出作業中に出土したものである。

土師器には非ロクロ土師器とロクロ土師器が見られる。前者の環は1～3のように体部中位や下位に段や軽い稜を持ち、対応する内面が屈曲するものとしないものがある。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理が施されている。他に4のような外表面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がナデ主体の土器も数点認められている。高环の脚部では8のような脚部下位に段を持ち、外面上にハケメ手法の調整が施されているものもある。SI 6から出土した第17図2・9のハケメ調整の环や鉢との関連が考えられる。甕では頸部に明確な段を持つもの、持たないものがある。ロクロ土師器の环には7のように回転糸切りで底部を切り離した後に体部下方から底部周縁を手持ちヘラケズリで再調整するものや、回転糸切り切り離し後の再調整がないものがあるが、いずれも内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ロクロ使用の环には内面に油煙とみられる痕跡が認められるものもある。須恵器の环には11のように底部を回転糸切りで切り離した後に全面を手持ちヘラケズリによって再調整を施すものと、10のように再調整がないもの、ヘラ切りによる底部切り離しのものなどがある。他に9のように体部中位が段に近い凹部をなすものもみられる。12は欠損部がつまみ部への立ち上がりとみて須恵器の蓋と考えたが、高环の环部の可能性もある。体部中位に段を持つ器高の低い器形で、口縁端部内面にも軽い段がみられる。13はカエリのある蓋である。15・16は須恵器の円面鏡の一部である。15は内・外堤とも欠損するが、脚部に幅1.5cmほどの細い透かしが、透かし間と幅を同じくして多数入るものである。それに対し16は透かし間が幅4cmほどと比較的広いものである。このほかにも観部内面に平行タタキ目が残る円面鏡の破片がある。

第4節 出土遺物から見た特徴

遺物には土師器や須恵器、土製の支脚、鉄製品、鉄滓、銅製品、砥石などがあり、これらはおもに古墳時代終末期から平安時代にかけてのものである。ここでは土師器などから細かな年代について検討してみたい。

土師器には非クロコロ土師器とクロコロ土師器があり、前者は土師器編年の栗田式から国分寺下層式に、後者は表杉ノ入式に相当するものである。

前者の壺では外面が有段丸底、内面がミガキ・黒色処理の特徴を持つものが多く、甕では頸部に段を持つものと持たないもののがみられた。こうした特徴は村田晃一氏が提示した宮城県中部から南部の地域の土器編年の4段階から5段階にあたる壺や甕にあり、年代的には7世紀中頃から8世紀初頭に位置づけられている(村田:2007)。この時期とみられる竪穴建物跡SI6の土師器壺(第17図2)や鉢(第17図9)には外面調整にハケメ手法がみられる。類例には仙台市郡山遺跡(仙台市教委:2005ほか)や東松島市赤井遺跡(矢本町教委:2001ほか)出土の壺や塊があり、また栗原市御駒堂遺跡からも類似した壺が出土している(宮城県教委:1982)。これらの特徴は東北地方北部の土師器に多くみられ、その影響を受けたか、もしくは移入された土器との理解がされている。この時期、あるいはその直後の時期の須恵器には器高が浅い壺、段やカエリを持つ蓋、円面硯などがある。第18図1は口径に対して底径が大きい器形の回転ヘラケズリ再調整の須恵器で、類例には大蓮寺窯跡5号窯跡の壺がある(仙台市教委:1993)。第21図12は須恵器の蓋と考えたが、高壺の壺部の可能性もある。今後の資料の増加を待つて再検討したい。

後者の土師器は須恵器の特徴も加えると、平安時代でも前期の9世紀から10世紀前葉までの時期のものと考えられる。さらに器形や底部切り離し技法などから、9世紀前半頃、9世紀後半頃、10世紀前葉頃のものがあり、それぞれ山王遺跡の第2~4群に相当する(宮城県教委:1996)。中でも今回出土の土器は、土師器壺内面のミガキ方向、土師器・須恵器の器形、底部切り離し後の再調整の特徴から9世紀前半頃のものが多くを占めている。またその時期に伴う可能性が高いのが会津若松市の大戸窯跡の製品と考えられる第17図7のような須恵器瓶類である。なお、今回の調査で初めて底部外面に「方」と読める墨書き土器が出土した。今後さらに文字資料が発見されることが期待される。

今回の調査では古墳時代終末期よりも古い遺物として、第21図17の石製模造品1点と、玉髓製の剥片が1点が出土している。本来どの層に存在したものかは不明であるが、基本層の年代把握とともに、これらの時期の遺構分布の把握も今後の課題である。

第5節 遺構の年代

第2次調査では遺構の分布把握を主眼としていることから、遺構の掘り下げはごく少数に留まっているが、その中でも遺構の時期が推定されるのは7世紀後半から8世紀前葉頃、9世紀代、10世紀前葉の頃である。竪穴建物跡では7世紀後半から8世紀前葉頃、9世紀代のものが確認され、それらは1トレンチ北半から3、4トレンチにかけて多く分布する状況が認めら

れる。掘立柱建物跡では小規模な柱穴掘方の埋土に十和田 a 火山灰を含むものが 2 棟確認されたが、そのほかの大きな堀方を持つ掘立柱建物跡や柱穴跡は出土している土器の特徴から、おもに 7 世紀後半から 8 世紀前半の時期の可能性が考えられる。また材木崩跡からは遺物の出土はなかったが、これら大きな堀方を持つ柱穴跡などに切られているところからそれ以前の可能性が考えられる。溝跡には主軸方位などから材木崩跡とほぼ同じ時期、7 世紀後半から 8 世紀前半頃のもの、9 世紀代から 10 世紀前葉の時期のものなどが推定される。土坑の SK1 の時期は 9 世紀後半から 10 世紀前葉頃と推定される。

第4章 総括

第1節 調査のまとめ

①第1次調査の南側調査区で確認された官衙的な様相を呈する大型の掘方を有する柱穴跡をはじめとする遺構群は、西側に設定した第2次調査区へも展開し、さらに未調査の西側へ展開することが明らかとなった。

②大型の掘方を有する柱穴跡が多数確認された。中には第1次調査で確認された一辺が1mほどの方形の柱穴群よりさらに大型の掘方を有するものも確認された。建物の規模や性格は不明であるが、真北方向に主軸方位を示すものと、N-40°-Wの主軸方位を示すものがある。

③掘立柱建物跡や規模の大きな柱穴跡は調査区南側で、竪穴建物跡は調査区北側に密集するという、第1次調査で確認されていた遺構分布状況を再確認した。

④区画施設と考えられる材木塀跡が確認された。L字に屈曲する2条の材木塀が軸方位N-40°-Wの同一軸線上にみられ、同時期に区画施設として機能していたものと考えられる。出土遺物は無いが、新旧関係は真北方向に軸方位を示す規模の大きな掘方を有する柱穴跡より古い。

⑤竪穴建物跡の時期は7世紀後半～8世紀前葉と9世紀代、規模の大きい掘方を持つ柱穴跡の時期は7世紀後半～8世紀前半、材木塀の時期は7世紀後半以前、埋土に十和田a火山灰を含む掘立柱建物跡や溝跡の時期は9世紀～10世紀前葉である。

⑥出土遺物には須恵器円面硯のほか、東海産、および会津大戸産須恵器がある。また須恵器环底部外面に原遺跡では初めてとなる墨書「方」が確認された。

第2節 遺跡の評価と今後の課題

柱穴跡の掘方の形状、規模の大きさから、律令国家が地域掌握のために設置した官衙的性格の施設が存在することがより一層明らかになった。規模の大きな柱穴跡は第1次調査以上に大型のものが確認され、特に平面長方形のものは最大で0.9×1.8mの規模を有するもの、掘方断面が階段状やスロープ状を呈するものが見られる。掘方規模の大きな掘立柱建物跡の規模、および機能時期を確認することが今後の最大の課題の一つである。

掘方規模の大きな柱穴跡は調査区南側、竪穴建物跡は調査区北側に分布し、第2次調査区よりさらに西側へ広がるものと考えられる。西側へは阿武隈川の自然堤防が延びており、遺跡範囲の確認も今後の課題である。

遺構の主軸方位は材木塀跡SA1をはじめN-40°-Wを示すものと、真北を示すものがある。それぞれの時期については新旧関係と共に今後の課題である。

出土遺物は第1次調査で出土した東海産須恵器円面硯に続き、第2次調査でも須恵器円面硯が複数出土しているほか、東海地方や会津若松市の大戸窯跡の製品と考えられる須恵器

が出土している。遅くとも 7 世紀後半には中央とのつながりが形成され、各地の土器が搬入されたものと考えられる。またこれらの土器は海上・河川交通等の水上交通によって運び込まれた可能性が考えられ、原遺跡が阿武隈川に近接する事を考えると、津や阿武隈川に接続する運河のような施設の存在についても今後考慮する必要がある。

遺跡の性格については、『延喜式』の「玉前駅家」や、多賀城跡出土木簡の「玉前割（関）」と明言しうる要素は得られなかたが、官衙的性格においての重要度は、第 2 次調査の結果によって、より増したと言える。

【引用・参考文献】

- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
岩沼市教育委員会 2015 『熊野遺跡（第 2 次調査）の概要』『平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨
岩沼市教育委員会 2017 『岩沼市・原遺跡の調査概要』『第 43 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
岩沼市教育委員会 2018 『岩沼市・原遺跡第 2 次調査の概要』『第 44 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
岩沼市史編纂委員会 2015 『岩沼市史』第 4 卷 資料編 I 考古
閑根章義 2014 「古代陸奥国における陶礎の受容と展開－城柵官衙遺跡を中心として－」季刊『古代文化』第 66 卷第 3 号
仙台市教育委員会 1983 『郡山遺跡Ⅲ - 昭和 57 年度発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第 46 集
仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書・総括編（I）』仙台市文化財調査報告書第 283 集
宮城県教育委員会 1982 「(4) 御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第 134 集
宮城県教育委員会 1991 『山王遺跡 - 仙塩道路建設関係遺跡平成 2 年度発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第 141 集
宮城県教育委員会 1996 『山王遺跡IV - 多賀前地区考察編』宮城県文化財調査報告書第 171 集
宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』
村田晃一 2007 「第 II 章 V. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学
文学部
矢本町教育委員会 2001 『赤井遺跡 1・社鹿柵・郡家推定地』矢本町文化財調査報告書第 14 集
矢本町教育委員会 2005 『赤井遺跡 2004・社鹿柵・郡家推定地』矢本町文化財調査報告書第 17 集

写真図版



1 トレンチ SD2 墨書き土器出土状況（北東から）



1 トレンチ遺構検出状況（南から）



1 トレンチ遺構検出状況（北西から）



2 トレンチ遺構検出状況（西から）



2 トレンチ遺構検出状況（北東から）



3 トレンチ遺構検出状況（西から）



3 トレンチ遺構検出状況（南西から）



4 トレンチ遺構検出状況（西から）



4 トレンチ遺構検出状況（南東から）



SI1 トレンチ北側竪穴建物群（南東から）



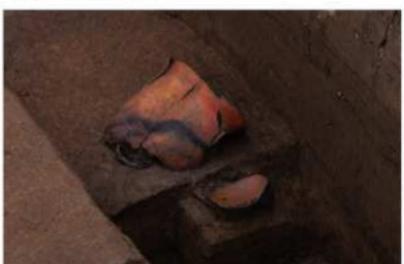
SI6、SI7（北東から）



SI4 カマド（南東から）



SI4 遺物出土状況（南西から）



SI6 土師器壊・甕出土状況（南東から）



SI6 土師器壊内骨片出土状況（南東から）



SI12 遺物出土状況（南西から）



SI13 遺物出土状況（南東から）



掘立柱建物跡 SB1・2（南西から）



掘立柱建物跡 SB3（北西から）



掘立柱建物跡 SB1 P68 半截（南から）



掘立柱建物跡 SB2 P69 半截（南から）



P29 半截（南から）



P37・38 半截（北東から）



P56 半截（南から）



P58 半截（南から）



P62 半截（北から）



P105 半截（北から）



1 トレンチの柱穴跡群（南東から）



2 トレンチの柱穴跡群（東から）



SA1 材木抜取痕跡（2T 北西から）



SA1 材木抜取痕跡（2T 東から）



SA1 南側屈曲部（北西から）



SA1 北側屈曲部（南から）



2 トレンチ拡張部（北西から）



調査区全景（上空から）



原跡地上空から岩沼市街を臨む（南から北を臨む）

三十三間堂遺跡



原跡地上空から阿武隈川を臨む（北西から南東を臨む）



竪穴建物跡出土遺物 1 土師器 坯



竪穴建物跡出土遺物 2 土師器 坯



竪穴建物跡出土遺物 3 土師器 坯



竪穴建物跡出土遺物 2 土師器 坯 ハケメ調整



竪穴建物跡出土遺物 3 土師器 坯 内面



竪穴建物跡出土遺物 6 須恵器 坯



竪穴建物跡出土遺物 3 土師器 坯 底部外面



竪穴建物跡出土遺物 6 須恵器 坯 底部外面



竪穴建物跡出土遺物 4 土師器 坯



竪穴建物跡出土遺物 5 土師器 坯



竪穴建物跡出土遺物 4 土師器 坯 内面



竪穴建物跡出土遺物 5 土師器 坯 内面



竪穴建物跡出土遺物 4 土師器 坯 底部外面



竪穴建物跡出土遺物 5 土師器 坯 底部外面



竪穴建物跡出土遺物 7 須恵器 瓶類 底部内面



竪穴建物跡出土遺物 7 須恵器 瓶類 底部外面



豎穴建物跡出土遺物 10 砥石 a



豎穴建物跡出土遺物 10 砥石 b



豎穴建物跡出土遺物 8 土師器 艶



豎穴建物跡出土遺物 9 土師器 鉢 外面



柱穴跡出土遺物 1 須恵器 壊



豎穴建物跡出土遺物 9 土師器 鉢 内面



柱穴跡出土遺物 1 須恵器 壊 底部外面



柱穴跡出土遺物 2 刀口金具



溝跡出土遺物 1 須恵器 壺 底部外面 墨書



溝跡出土遺物 1 須恵器 壊



溝跡出土遺物 2 須恵器 円面硯



土坑出土遺物 1 土師器 壊 底部外面



溝跡出土遺物 2 須恵器 円面硯



その他の出土遺物 1 土師器 壊



その他の出土遺物 2 土師器 壊



その他の出土遺物 3 土師器 壊



その他の出土遺物 4 土師器 壊



その他の出土遺物 5 土師器 坯



その他の出土遺物 7 土師器 坯



その他の出土遺物 8 土師器 高坯



その他の出土遺物 7 土師器 坯 底部外面



その他の出土遺物 10 須恵器 坯



その他の出土遺物 11 須恵器 坯



その他の出土遺物 10 須恵器 坯 底部外面



その他の出土遺物 11 須恵器 坯 底部外面



その他の出土遺物 9 須恵器 壊



その他の出土遺物 12 須恵器 蓋 (壊身か)



その他の出土遺物 13 須恵器 蓋



その他の出土遺物 12 須恵器 蓋 内面 粉殻痕 (?)



その他の出土遺物 14 須恵器 蓋



その他の出土遺物 15 須恵器 円面硯



その他の出土遺物 15 須恵器 円面硯 内面 指紋



その他の出土遺物 15 須恵器 円面硯



その他の出土遺物 16 須恵器 円面硯



その他の出土遺物 16 須恵器 円面硯



その他の出土遺物 17 石製模造品 a



その他の出土遺物 17 石製模造品 b

報告書抄録

岩沼市文化財調査報告書第19集

原遺跡第2次調査概要報告書

平成30年3月31日

発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜1丁目6番20号

生涯学習課 TEL0223-23-1111 内線573

印刷 株式会社 国井印刷

岩沼市藤浪一丁目4-35 TEL0223-22-2221